

—スタッフ紹介—

役 職	スタッフ名
主任部長兼血液浄化センター長	重松 隆
部長兼血液浄化センター長	根木 茂雄(9月退職)
副医長	村津 淳
副医長	南方 大和
副医長	和田 龍也
非常勤医員	松本 直也

—概要—

腎臓内科の主たる業務は、腎臓内科領域と血液浄化領域の二つに分けられる。

腎臓内科領域では糸球体腎炎や慢性腎臓病(CKD)、高血圧症、糖尿病性腎臓病、薬物性腎障害、ネフローゼ症候群、うっ血性心不全や保存期治療可能な急性腎障害(AKI)に対する治療が中心で、可能であれば経皮的腎生検を施行して確定診断をつけ、末期腎不全への進行を阻止するため、降圧剤やステロイドや免疫抑制薬を駆使して治療を行っている。CKD患者に対しては、透析導入を遅らせるよう外来において血圧のコントロールや食事療法、体液管理などを行う。

血液浄化領域に関しては、末期腎不全患者に対して合併症のない適切な時期での血液透析導入を心がけている。主として血液浄化療法については血液浄化センターにて血液透析療法を始め診療をおこなっているが、最近では腎臓内科が主科の患者より、院内入院の他科の症例が過半数を占めるようになり、中央診療部門の色彩が強くなりつつある。他院での維持透析患者の併存症や合併症治療による当院への腎臓内科以外の入院患者の対応を行なっている。特に重症の急性腎障害(AKI)は救急診療部門や心臓血管外科などの症例が多く、本年の特徴として、他院で維持透析施行中患者のCOVID-19罹患による当院への転送入院や、COVID-19患者の重症化による多臓器不全を伴う重症急性腎障害などに対して種々の血液浄化療法を行ったことが挙げられる。このように、腎臓内科はさまざまな合併症に関しては他診療科と連携をとり治療を行っている。

血液透析患者において最も重要なバスキュラー・アクセス(VA)に関しては新規の自己血管内シャント(AVF)造設から人工血管(AVG)移植、VAトラブルに対する再建術(AVF,AVG)や経皮的血管形成術(PTA)まですべて当科で施行している。腎臓内科としてバスキュラー・アクセスのほとんどの診療を行なっている医療機関は極めて珍しく貴重な施設となっている。他院から紹介されるVAトラブルの症

例に対しては迅速な対応を心がけており、時間外であっても直ちにPTAや手術を施行している。2021年度のVA手術は計86件、PTAは168件であった。透析用カテーテル(短期型,長期型)も必要に応じて当科で挿入している。2021年度の長期留置カテーテルは14件であった。透析以外の血液浄化療法に関しての症例数は多くないが、血症交換療法(単純血漿交換やLDLアフェレシス)も施行して治療を行っている。透析室以外でもICUにおいて急性腎障害を合併した重症患者に対して持続的緩徐血液浄化療法を施行している。腎臓だけに止まらず、さまざまな合併症を有した患者に対して、他診療科と連携して血液浄化療法を施行しながら全身管理を行い治療にあたるのが当科の特色である。

—実績—

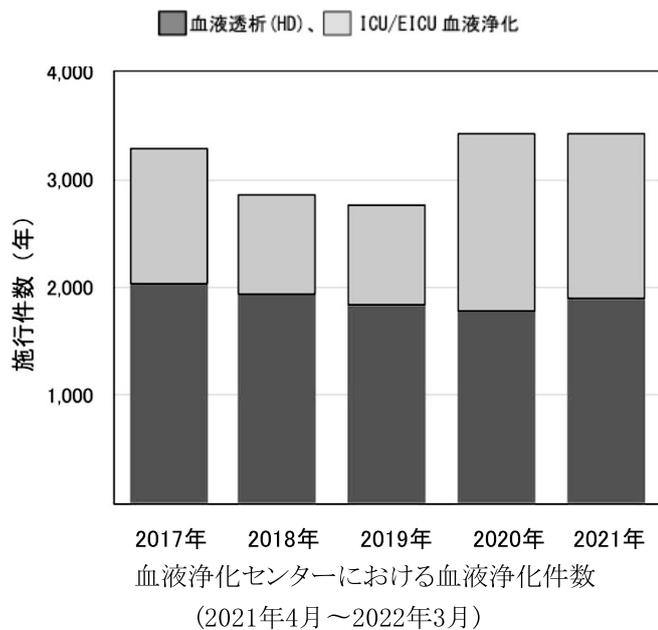
腎臓内科全体としては、新入院数が2020年度の192名から2021年度は232名と増加し、平均在院日数も2020年度の22.2日から2021年度は20.3日と短縮した。これに伴い、稼働額も2020年度の285,291千円から2021年度は331,864千円と増加した。

腎臓内科における手術手技関連(2021年4月～2022年3月)

全手術手技	113
・新規バスキュラーアクセス(VA)作成 および再建	74
・VA移植術	11
・腹膜透析用腹膜カテーテル留置術	2
・他の血管吻合術	1
・創傷処置	3
経皮的内シャント拡張術・血栓除去術	156

血液浄化センターにおける関連業務(2021年4月～2022年3月)

血液透析(HD)施行	1,890件
ICU/EICU血液浄化	1,534件
血漿交換(全血・選択的を含む)	49件
LDL吸着療法	23件
腹水濾過濃縮再静注法(CART)	5件
経皮的血管拡張術	168件
シャント診察	65件
透析導入事前訪問	22件
末梢血幹細胞採取	17件
骨髄液濃縮	2件



—今年度の成果と反省点—

今年度はCOVID-19の蔓延のために、一般住民において健診受診数が大きく落ち込んだ。その結果、たんぱく尿や血尿等にての紹介患者受診数が落ち込んだ。逆に言うと生命予後に直結する血液浄化療法が必要となる急性腎障害例や末期腎不全による透析療法導入例などは大きな影響は見られず、かえって増加する傾向すら見られた。

人力的に、根木茂雄部長が年度途中にて退職となったのは当科にとって大きな痛手であり、その影響は患者数の減少など顕著な影響が認められた。しかしながら、臨床的には満足できる1年であったが、学会発表や治験・臨床研究など学術的な成果に関しては十分とは言えなかった。

—来年度への抱負—

泉州地区の透析導入を減らすため近隣の先生と連携してCKD患者の治療を積極的に行い、紹介患者数の増加に努力したい。臨床だけでなく治験獲得や研究の面を充実させ、研究会や学会発表を行っていききたい。その成果としての原著や総説等の執筆も行う。